

魔法のプロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 近田 知世

所属: 新居浜市立高津小学校

記録日: 2023年 2月 8日

キーワード: 行動の切り替え 注意・集中

【対象児の情報】

・学年

小学3年生の男児

・障害名

自閉スペクトラム症疑い、AD/HD 疑い

・障害と困難の内容

- チャイムを聞いたり時計を見たりして、次の行動へ移すなどの行動の切り替えが自分では難しい。
- 自分の世界に入りこみやすく、集中が途切れやすい。そのため、途中で活動が止まって時間が掛かる、指示を聞いていない、声掛けに反応しにくいなどの姿が見られる。
- 不適切な言動もそのまま真似するなど、適切な状況判断ができにくい。

【活動目的】

・当初のねらい

- ① 自分にできることを増やし、生活能力やソーシャルスキルの向上を図る。
- ② できた達成感を味わいながら、集中して学習に取り組む。

・実施期間

令和4年4月～令和5年2月

・実施者

近田 知世

・実施者と対象児の関係

特別支援学級担任と在籍児童

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

○ 生活面

登校後の荷物の片付けや給食の準備、着替えなどは、手順を理解し自分で行うことができる。しかし、途中で自分の世界に入ってぼんやりすることが多く、時間がかかる。授業後、使った教科書の片付けや次の準備をせずに遊び始めてしまうため、授業の始業時刻に間に合わないことが多い。チャイムを聞いたり時計を見たりして次の行動に移るなどの切り替えは難しく、指導者の声掛けがないと、いつまでも遊んでしまう。登校は、保護者の車での送迎、下校は放課後デイサービスや保護者の車での送迎で行っている。排尿の感覚がまだつかみきれず、慌ててトイレに行こうとしたり少し失敗したりすることがある。食事の介助は必要ないが、食べ方のマナーや適切な量の調整には指導が必要である。清掃は、手順を覚えて自分のやるべきところをきちんと分かって取り組んでいる。手が止まることはあるので、声掛けは必要である。大便時の仕上げ拭きや入浴、入浴後のタオルで体を拭く際などに、保護者の介助を受けている。

○ 学習面

やるべきことに真面目に取り組もうとする。計算やノートを書き写すなどは得意である。自分の世界に入りこみやすく気が散りやすいため、集中が途切れやすい。注意を向けてから教師が話すと、発問もしっかり聞いて考えて答えたり、ノートに書いたり活動に取り組んだりできる。聞いていなくて分からないときは、周りの児童の様子をきょろきょろ見て、取り組もうとする。同じ支援学級には、6年生と4年生と3年生の3学年の男子計5名が在籍している。(3学期より3年生

男子1名が転入し、計6名となった。)同学年の児童がおり、ほぼ同じ学習内容で日々一緒に学習している。社会科や理科、音楽科などを交流学級で行っているが、補充が必要な場合もある。

○ 状況判断・コミュニケーション

穏やかな性格で心理的に安定していることが多い。周りの児童の動きを見て活動することができるが、悪いモデルでもよく考えずに真似をしたり、適切でないときに笑ったりする面があり、状況を判断して行動することは難しい。視線が合いにくく、周囲からの呼び掛けや働き掛けに対して、すぐに反応しにくい。聞こえているが聞き流して自分のしたいことを優先しようとする面がある。肩を叩く、大きな声で呼ぶ、何度か声を掛けるなどが必要である。質問に対して単語で答える、内容とずれた答えをする、自分から相手に質問ができにくいなどの姿が見られ、会話での多様なやり取りができにくい。

・活動の具体的な内容

① 自分でできることを増やし、生活能力やソーシャルスキルの向上を図る

○ 休憩する前の手順の定着を目指して



やることカード



写真1



写真2



写真3

声を掛けないと筆箱の中身や教科書、椅子などを片付けないまま休憩して遊ぼうとするA児である。準備ができていないため、始業のチャイムで授業が始められなかったり、移動教室の際には、おもちゃの片付け→机の上の片付け→次の授業の準備→出発となるため遅れそうになったりすることが多かった。声を掛ければするものの、必要な習慣を身に付けることと、自発的な行動を促すことを目指して、「やることカード」を活用した(写真1)。項目は、「片付け、次の授業の準備、トイレ、シャツを入れる」(写真2)である。休憩のチャイムが鳴ると自分でアプリを起動し、上の項目から順に行っていた。休憩時間毎にタスクを作成し(写真3)、一つ行動できたらタップして星を色付けさせ、タスク中のすべてに星が付くとプレゼントで魚がもらえるので、それを楽しみに進んで取り組んだ。

一日に大体3びきもらうことができ、魚が増えることを楽しみに、休憩時間に先にやるべきことをする姿が見られるようになった。また、次の準備を終えているので、移動教室の際もスムーズに移動ができるようになった。しかし、大体二週間でプレゼントをコンプリートすることになり、もらえる魚に目新しさがなくなってくると、モチベーションが下がってしまい、タブレットを起動することを忘れるなど、声掛けがないと継続が難しくなった。

○ 始業のチャイムに間に合うことを目指して

始業のチャイムが鳴っても自発的には遊ぶことがやめられないA児である。何度か声を掛けやっとな片付けを始める。一緒に交流学習に行く児童が欠席したときには、授業が始まっても一人で遊び続けていたこともあった。行動の切り替えがスムーズになり、声掛けがなくても合図を聞いて動くことができるよう「時計」のアラーム機能を活用した。



時計

始業のチャイムの3分前(移動教室用)と1分前(自教室用)のアラーム設定を作成し、それぞれアラーム音を変えて設定した。初めは、アプリ内のアラーム音を設定していたが、そのアラーム音が児童の興味を引かないためか、アラーム音だけでは行動を移すことはできず、声掛けも必要であった。また、おもちゃの片付けの時間を考慮すると、3分前では間に合わないことがあった。そのため、途中から移動教室用を4分前に設定し、また「Garage Band」を使って、CDなどから音楽を録音し、アラーム音に設定した。曲は、4分前に児童もよく知っている「ピタゴラスイッチ」、1分前にA児が好きな「スーパーマリオ」を設定した。



Garage Band

曲を変えた方が耳に残りやすかったようで、曲を変えてすぐは、アラーム音が鳴ると、「あっ、ピタゴラスイッチ。」と言っておもちゃの片付けを始める姿が見られた。ただ、慣れてくると、アラーム音を聞くだけでは反応せず遊び続けることが増えた。ただ、反応していないのを見て、曲が鳴っているときに教師が「何の合図？」と聞くと、「移動。」と答え、「じゃあどうする？」と聞くと「片付ける。」というやり取りを経て、おもちゃの片付けを始めたり、同じクラスの3年生の児童が曲を聞いて動くので、それを見て自分も片付けを始めたりするという姿が見られるようになった。4分前のアラームでは、移動教室が遠いときや片付けに時間がかかってしまったときなど、始業の合図に間に合わないことがたまにあるが、1分前の合図では、始業のチャイム時に席に座れていることがほとんどになった。

○ 登校後の支度をスムーズに行うことを目指して



絵カードタイマー



写真4

登校後の鞆の片付けや提出物を出すなどの流れは理解し、自分で行うことができるA児である。しかし、途中で自分の世界に入ってしまうことで時間がかかってしまい、8時10分までに全ての活動が間に合わないことが多かった。やるべきことと残り時間を視覚的に分かりやすく表示することで、児童が意識を向けて過ごせるのではと考え、「絵カードタイマー」を活用した。

残り時間とやるべきことが同時に表示されるため(写真4)、残り時間を見て慌て、次にするべきことを確認して動くという姿が見られた。ただ、絵カードタイマーの画面を電子黒板に大きく表示しているものの、続けていくうちに目新しさがなくなり自分で意識して画面に目を向けることは難しく、教師の声掛けで画面を見る→続きの活動を行うという流れになることが多かった。

○ 話す聞くスキルの向上を目指して



ロイロノート



写真5



写真6



写真7

話している相手の顔を見て聞くことがなかなか難しい A 児である。声を掛けて注意をこちらに向けさせても、持続が難しい場面が多い。自分の興味があることは話し、分からないことは質問できるが、雑談をしたり質問に適切に答えたりすることなどは難しい部分がある。話す聞くスキルの向上のため、毎日行う朝の会に、日直が行うトークタイムの時間を設けている。無作為に選んだ質問に答える質問ブックと、決まった題について事前に原稿を考えて話すスピーチの活動の内、スピーチを行う際に、「ロイロノート」を活用した。持ち帰り時の宿題として、家庭で題に合った写真を撮って提出し、その写真について話したいことを学校で教師と一緒に考えた。ロイロノートで、「写真を撮る」「提出する」は、交流の授業等でも行っているため、自分でできた。ロイロノートを活用したスピーチは「自分のお気に入りのもの」(写真5、6)「自分の家から見える風景」(写真7)などの題で行った。スピーチの際は、写真を電子黒板に映しながら発表した。どうしても原稿を読む形になるが、他の児童からの質問に一生懸命答えようとしていた。答えが明らかに間違っているときは、担任が質問を言いかえて理解できるようにしてからもう一度答えさせたり、A 児の言いたいことを代弁した上で言わせたりした。普段、他の児童のスピーチに対して、顔を上げて集中して聞くことが難しいが、写真を見せながらのスピーチだと、写真に着目し聞くことができていた。

○ 登下校を歩いて行うための一歩として



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11

登下校は車で送迎で、普段道路を歩くことが少ない A 児である。小学校卒業後のことも考え、今後、保護者と一緒に道路を歩く機会を増やしたり、登下校の一部でも保護者と一緒に自分の足で歩くことができるようにしたりするための一歩として、自立活動の時間に道路の通行や登下校の道の安全について、3 年生の児童 3 人で一緒に学習した。

授業の中では、それぞれのタブレット端末に送った「こくみん共済 7 才の交通安全マップ」を見て、危険な行動をしている子ども探して自分の見付けたことを交流したり、「JA 共済 親子で学ぶ交通ルール」の動画やクイズを見たりすることで、歩行時や道路周辺での危険に気付くことができた。(写真8、9)その後、「Google Maps」で自分の家から学校までの道で危険を感じる場所を探して、「なぜ危険と思ったか」「どう行動するとよいか」を考えさせ、発表し合った。(写真10、11)他の児童の気付きを聞く中で、「車がたくさん通る道だから、端を歩いたほうがいい」「車がバックしてくるかもしれないと思って、通った方がいい」などの意見が出て、「もしかしたら・・・」という気

持ちで気を付けることが大切だと話し合うことができた。タブレット端末を持ち帰る際の宿題として、学習した内容を家で見せて家族と話し合う課題を出し、家庭でも話をしてもらおう機会を取った。その週末に、A 児は家族と家の近くの道路を歩く練習をしたそうである。実際に歩く経験をすることで体感として理解することがあるだろうし、その経験の積み重ねで少しずつ安全に歩行することができるようになっていくのだと考える。今後も、そういった機会を家庭でも積み重ねてもらい、学校でも、遠足のときなど校外に出る機会を生かし、継続して指導していきたい。

② できた達成感を味わいながら、集中して学習に取り組むことを目指して

○ 学習系アプリの活用



ひとコマ漢字



あんざんマン



タブレットドリル



ピノバ理科



ピノバ社会

基本的に、やるべきことに最後まで取り組もうとする A 児である。学習内容の理解も早く、45 分の授業時間でやるべき課題が早く終わることが多い。また、他学年も在籍しているので、既習事項はプリントやドリルなどを使い自分で学習する時間がどうしてもできる。プリントや練習問題にもきちんと取り組むが、疲れてくると集中が切れやすくなり、手が止まることが多かった。また、交流学級で学習している理科や社会についても補充が必要な場面もある。そこで、タブレットの学習系アプリや WEB サイトのクイズを活用することで飽きずに学習に取り組むことや、すき間時間を利用して補充学習を行うことを目指して、学習系アプリの活用を行った。

基本的には、使うアプリやサイトは国語の時間は国語系、算数の時間は算数系のアプリを使うよう指示することが多かった。適宜、理科や社会についても指示をして取り組ませた。「タブレットドリル」は家庭での宿題として取り組ませることもあった。A 児は好みのアプリがあるものの、指示されたものを使って学習に取り組んでいた。A 児は、どのアプリも意欲的に取り組んだが、星を獲得したり、ボスを倒したりといったゲーム的な要素を特に気に入っていたようで、「やった一星ゲット。」「ボスが出た。」と言いながら楽しんで取り組んでいた。特に、気に入って取り組みたがったのは、「ひとコマ漢字」と「あんざんマン」であった。頑張っ取り組めばタブレット端末での学習ができるという思いが、モチベーションにつながっている面もある。気に入っているアプリでの学習を始めると、集中を切らさないまま 10 分以上取り組み続けることも容易であった。

○ ロイロノート活用した国語科「宝島の冒険」の実践



ロイロノート



写真 12



写真 13

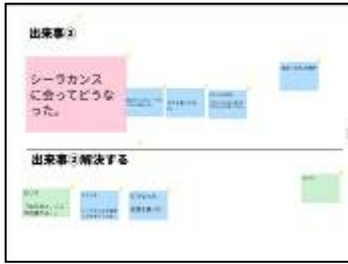


写真 14



写真 15



写真 16

国語科の「宝島の冒険」という物語を書く教材で、物語のアイデアや構成を考える際に、ロイロノートを活用した。

まず、物語の主人公を想像することから始め、描いた絵の周りに想像を膨らませてたくさんメモを作った。(写真12、13)同じようにして、地図の手に入れ方や、島の生物との出会いなどをカードに書き、お話がうまくつながるように、カードの順番を入れ替えたり足したりしながら、物語の構成を考えた。(写真14、15) 順番を入れ替えたり、言葉を足したり直したりする際にも、消しゴムを使う必要がなく簡単のため、児童の思考が整理しやすかった。作成したカードを元に物語を書き、A児の個性の出たユーモラスな作品を仕上げることができた。(写真16)

・対象児の事後の変化

○ 生活面

授業の始業のチャイムで席に座っていることはできるようになってきた。授業後の片付けと次の授業の準備は、年度当初は、声を掛けないとできていない状態であったが、現在、声掛けなしで、自分でできている割合は、3割ほどである。少しずつ習慣付いてきたが、できていないときは他に気を取られそのまま忘れてしまっているようである。トイレも、今年度学校で下着を変えるような失敗はなかった。始めは、休憩時にはトイレに行くというルーティンにしていた部分があるが、現在は休憩時間にトイレに行くかどうか尋ねると、「行く」と言うときと「行かなくていい」と言うときとある。「行かない」という選択をして、次の休憩時間に慌ててトイレに行くということもあるが、少しずつ自分の尿意の感覚が分かるようになってきたと思われる。スピーチの際に写真を活用することで、話すだけのときより、発表者の話に注意を向けられることが増えた。ただ、普段の生活や授業の中で、注意集中を促す声掛けが必要な場面は多く、大きな変化は見られなかった。

○ 学習面

タブレット端末を使った学習の際の方が、気が散ることが少なく、集中して取り組んでいることが多い。タブレット端末を使わない普段の授業の時には、学習内容が早く終わった際に自分から、「タブレットしていいですか?」と聞きに来ることが多い。その際も、してもよい範囲の中で、自分でアプリを選び、よく集中して取り組んでいる。残り時間が少なくてもやりたがり、チャイムが鳴ってもきりがいいところまでは学習を続けようとする。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

授業の始業に間に合うようになってきた A 児であったが、それは「本人がアラームを聞いたことで行動を切り替えた」という場面よりも、「アラームを聞いて周囲の児童が動く→それを見たり、発する言葉を聞いたりして A 児も動く」という場面が多かったように感じた。個別の声掛けが必要な A 児が、少しでも自分で行動の切り替えができるようにと考えて行った実践であったが、今後の実践のポイントは、いかに A 児の注意を向けさせるかということであるように感じた。アラームにしても、絵カードタイマーにしても、A 児が聞き流すことができってしまうため、行動の切り替えに至らない点があったように思う。タイマーの音を切る役を A 児にさせると、次の行動に切り替えるきっかけになったかもしれない。自分のスケジュールを

把握しそれに沿って行動できるようになることは、今度 A 児が自立していくにあたり、必要なスキルであると考えている。A 児には、サイズが小さく常に持ち歩けるスマートフォンや身につけておける Apple watch などでスケジュールの管理を行い、アラームや振動で注意を向けさせる方が効果的かもしれないと感じた。

また、やることカードも、休憩時間ごとに機器を取って起動させるというひと手間があったため、忘れてしまうということにつながったように感じる。スタンドにタブレット端末を固定して席の横に常に置いておくなど、本人にとってなるべく「簡単」で「手間が掛からない」方法を探すが、継続を目指したり、A 児が一人でできることを増やしたりするために大事なのではないかと感じた。

また、アラーム音を A 児のよく知っているものにした方が、反応が良く聞き分けもできていたので、児童の好みや関心のあるものを活用することは、有効なのだと改めて感じた。学習系のアプリにしても、A 児は、ゲーム的な要素やご褒美があるものの方が食いつきがよく、集中して取り組むことができた。その点も、今後の実践に活かしていきたい。

さらに、今回の実践は、学校での活動がほとんどであったが、登下校の実践のように学校で学習したことを家庭に持ち帰るということがもってこられたら効果的だったのではないかと考える。今回の学校での実践を、タブレット端末を使って家庭と共有したことが、A 児の家庭での実践につながったと考えられる。この実践以外にも、学校で使っているスケジュール管理に関するアプリを、家で宿題をする際など必要な場面で活用するなど、もっとタブレット端末を活用できる場面があったのではと感じる。動画や写真も簡単に撮ることができ、見せることができるこのタブレット端末は、学校での学びを家庭に共有し広げていくためのツールとして、非常に有効だと感じる。A 児が出席停止で長く欠席するということがあったが、その際タブレット端末を使うことで、連絡を取り合ったり、学習系アプリを使って学習をしたりすることができ、タブレット端末の便利さを実感した場面であった。今後もっと活用できる場面を探していきたい。

・エビデンス(具体的数値など)

今回取り組んでみて、実践の中で見かけた A 児の様々な姿や年度当初と比べて見られた変化が、今回のタブレット端末を活用した実践の成果であると客観的に評価する指標を得ることは難しかった。ただ、実践者がタイマーの設定を忘れて教室を離れてしまった際には、始業のチャイムを聞き流し一人で遊んでいる A 児の姿があった。しないよりは、した方が、適切な行動につながったとは言える。

・その他エピソード(画像などを含めて)

A 児に限らず、「タブレット端末を使う」ということ自体が、児童の意欲を高めたり興味を引いたりしているように感じる。ただ、興味を引くからこそ、使うルールがきちんと守れなかったり、個別に対応をしようとする周りの児童も同じようにやっていたりすることもあった。今回 A 児に焦点を当てて実践を考えたが、その辺りのバランスも考え、クラスみんなで取り組んだり、同学年みんなで取り組める課題を考えたりした。

自分は正直まだ十分タブレット端末を使いこなせているとは言えない。タブレット端末を活用できる場面は、もっとたくさんあると思う。今後も、ツールの選択肢の一つとしてタブレット端末もあると考え、その使用が活動のねらいを達成するために有効かどうかを考え、日頃の実践を行っていきたい。児童が生きていく今後の社会では、ICT 機器を活用することが当たり前前の社会になっていくのだと思われる。研修会に参加し、色々な先生方の話を聞く中で、本当の意味で子どもたちが ICT 機器を活用できるようになるためには、今自分がしているように指示した場合にのみ使用を限定するのではなく、もっと自由に機器を使うとよいタイミングを自分で考え、自分のライフスタイルに合った使い方を模索していくことが必要なのではないかと感じた。ただ、そのためには、ルールを守り適切な使い方ができるように指導していくことが必要である。ICT 機器が児童の人生を豊かにするための便利なツールとして活用していけるように、今後も模索し続けていきたい。